子どもが生き生きと学ぶ社会科学習の工夫

― 4年　「ごみとわたしたちのくらし」の指導を通して ―

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 21
Ⅱ　研究の仮設 …… 21
Ⅲ　研究の全体構想 …… 22
Ⅳ　研究の内容 …… 23
　1　子どもが生き生きと学ぶ社会科の授業 …… 23
　　(1)　子どもたちのアンケートより …… 23
　　(2)　教える授業から追求する授業　―「なんだ！」から「あれ！」へ― …… 23
　2　第4学年の目標 …… 25
　3　第4学年の目標内容の構造 …… 25
　4　教材開発について …… 26
　　(1)　子どもの意欲を引き出し思考をゆさぶる教材 …… 26
　　(2)　地域の教材化の利点 …… 26
　　《実践―ごみの教材開発について―》 …… 27
　5　体験的学習活動 …… 27
　　(1)　体験的学習活動の方法分類 …… 27
　　(2)　体験的活動を組み入れる三つの場面 …… 29
　　《実践―体験的活動を取り入れた学習活動》 …… 29
　6　指導過程の工夫 …… 31
Ⅴ　授業実践 …… 32
　1　単元名 …… 32
　2　単元について …… 32
　3　単元全体の学習計画 …… 33
　4　本時の指導（1／8） …… 35
　5　　〃　　（3／8） …… 37
　6　　〃　　（8／8） …… 39
Ⅵ　研究の成果と今後の課題 …… 40

宜野湾市立普天間第二小学校
宮　平　香　代　子

〈社会〉

子どもが生き生きと学ぶ社会科学習の工夫

― 4年 「ごみとわたしたちのくらし」の指導を通して ―

宜野湾市立普天間第二小学校 教諭 宮 平 香 代 子

I テーマ設定の理由

今日、情報化、国際化、価値観の多様化等の社会の変化が著しく進んでおり、それは、今後も予想される。そのような社会において、子ども一人一人が主体的に生きていくためには、「自分なりのものの見方や考え方をもって判断し、行動できるようにすることが大切である」と言われている。そこで、子どもたちが、人間、自然、社会、文化等に進んでかかわり、自ら考え、主体的に判断し、表現したり、行動したりする学習活動を進める必要がある。つまり、子どもの主体的な学習活動を展開することが大切になってくるであろう。

社会科は、主として人間と人間のかかわりや、人間と社会や自然、文化とのかかわりを学ぶことを通して、子ども一人一人の生き方を追究させていく教科である。そのためには、子どもの生活体験の中から生まれる問題意識を出発点として、一人一人の思考を大切にしながら、子ども自らがその問題の解決を目指して追究していく主体的な授業を組み立てていかなければならない。

しかし、私のこれまでの実践を振り返ってみると、子どもたちに調べ学習や見学等の体験的な学習を取り入れても、子ども一人一人の思考を大切にし、自らの問題の解決を目ざして追究していくような授業にはならなかった。それは、ややもすると教師主導の授業が多かった事と、自らとのかかわりで、社会的事象を考えさせなかったことに原因があると考えられる。

そこで、子どもが自ら社会的事象とのかかわりをもてるような教材を開発したり、体験的活動を取り入れたりすることで、子どもたちが、生き生きと学習に取り組んでいくであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究の仮説

次のような支援を行なうことで、子どもたちが生き生きと学ぶ学習ができるであろう。

1 学習をつかむ段階において、子どもの身近な教材で、感動・驚き・疑問等をもつことができる教材を提示することによって、興味・関心が高まり、「調べてみたいな。」という意欲が高まるであろう。

2 学習を進める段階で、体験的活動を取り入れることで、子ども達は生き生きと追究するであろう。

3 まとめの段階において、自分の生活とのつながりを見付けることによって、社会的事象を自らの問題としてとらえようとするであろう。

III　研究の全体構想

教育関係法規

・日本国憲法 ・教育基本法
・学校教育法
・学校教育法施行規則

学校教育目標

1、進んで学習し、よく考える子
2、明るく心豊かな子
3、じょうぶで気力のある子

社会科の目標

社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる民主的、平和的な国家社会の形成者として、必要な公民的資質の基礎を養う。

子どもの実態

・明るく、素直である。
・男女仲良く、楽しい雰囲気で学習する。
・与えられた課題は取り組むが、自ら進んで学習する子が少ない。
・話を最後まで聞くことができない。

研究テーマ

子どもが生き生きと学ぶ社会科学習の工夫
―4年「ごみとわたしたちのくらし」の指導を通して―

研究の仮説

1、**学習の導入において**、子どもの身近な教材で、感動・驚き・疑問等をもつことができる教材を提示することによって、興味・関心が高まり、「調べてみたいな。」という意欲が高まるであろう。
2、**学習を進める過程において**、体験的活動を取り入れることで、子どもたちは、生き生きと追究するであろう。
3、**まとめの段階において**、自分の生活とのつながりをみつけることで、社会的事象を自らの問題としてとらえようとするであろう。

研究内容

生き生きと学ぶ社会科の授業について	4年生の社会科について	授業展開の工夫 ・教材開発　・体験的活動の取り入れ　・指導過程の工夫

研究の方法

1、文献・資料に基づいた理論研究
2、社会科研究会への参加
3、指導案検討・検証授業による研究
4、担当指導主事の指導助言

検証授業と考察

研究の成果と今後の課題

Ⅳ　研究内容

1　子どもが生き生きと学ぶ社会科の授業

(1)　子どもたちのアンケートより

・あなたは、社会科がすきですか。	はい　23人	いいえ　7人

・「はい」と答えた理由は何ですか。	ア、いろいろなことが、わかるから(20人)　イ、授業がおもしろいから(2人) ウ、テストの点数が、よかったから(1人)
・「いいえ」と答えた理由は何ですか。	ア、勉強することが多いから(4人)　イ、成績が悪いから(2人)　ウ、調べることが多いから(1人)
・どんな勉強のやり方が楽しく、よくわかりますか。	ア、自分たちで調べたり、見学したりする勉強(21人)　イ、先生のお話が多い勉強(12人) ウ、テレビを見る勉強(10人)

〈考察〉

アンケートから、約３分の２の子どもたちは、「社会科はいろいろなことがわかるから好き。」と言い、自分たちで調べたり、見学したりすることを好んでいるという結果がでた。

これらのことは、新しいものへの興味・関心が高く、物事を自分で調べてみたいという４年生（中学年）児童の特色であると考えられる。

しかし、子どもたちの実態をみると、自分で問題を見つけて、可能な限り自分の力で追究していくという態度が弱い。有田氏（愛知教育大学教授）は、今の子どもたちに何が一番欠けているかといえば、「問題発見力」だという。受け身で、自らまわりのものに「問いかけよう」とする意欲が欠けているようだという。そこで、まず、素朴な「なぜ」「どうして」という疑問を、普段の生活の中から掘り起こし、あたりまえだと思っていることに対して、どうしてそうなったか考える癖をつけていくようにする。また、おもしろい教材を提示して問題を引き出し、それを可能な限り自分で追究していくように、ねばり強く指導しなければならないであろう。

(2)　教える授業から追究する授業　―「なんだ！」から「あれ！」へ―

これまでの授業は、「未知（わからない）を既知（わかる）に変えるもの」であった。つまり、「教え・わからせ・理解させる」授業であった。一時間の終わりには、問題が解決し、「なんだ！こんなことだったのか」と、安定した状態で終わるもので

あった。しかし、これでは、今日の授業から明日の授業へ続かない。

そこで、子どもたちが、「既知(わかっている・理解している)と思っていることが、実は、表面的なことで、本質的には何もわかっていない（未知）のだ。」ということに気づかせるように工夫して指導しなければならない。

その手立てとして、わかっていると思うことをネタでゆさぶりをかけ、子どもたちに、「あれ！」「わからないや」といわせるようにしたい。わかるかわりに、疑問をもたせたり、問題を引き出したり、追究しようという意欲を引き出したりする授業を志向し、子どもたちに「あれ！」といわせ、「調べてみたい→どこで、どのように調べたらよいのだろうか」と考えるような子にしたい。

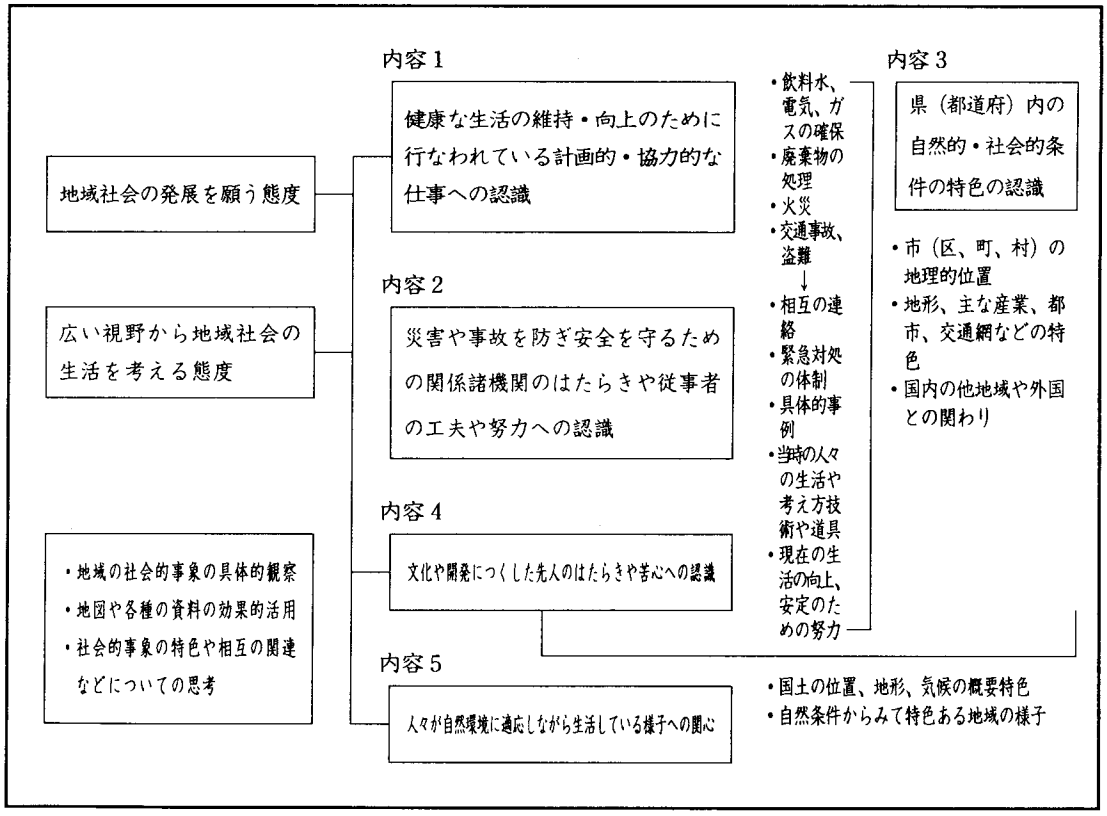
このような授業を生き生きと学ぶ社会科の授業ととらえている。

2　第４学年の目標

（１）地域社会における人々の健康や安全を守るための諸活動、地域の地形や産業などの様子及び地域の発展に貢献した先人の働きを理解できるようにし、地域社会の成員として地域社会の発展を願う態度を育てる。
（２）自然環境としての国土の特色や自然条件からみて国内の特色ある地域における人々の生活の様子について理解できるようにし、広い視野から地域社会の生活を考える態度を育てる。
（３）地域における社会的事象を具体的に観察し、地図や各種の資料を効果的に活用できるようにするとともに、社会的事象の特色や相互の関連などについて考えるようにする。

この学年の目標を一言でいえば、
「地域社会の一員としての自覚を育てる」
ことである。

3　第４学年の目標内容の構造



4　教材開発について

教材を開発するということは、子どものまわりに無限に存在する素材を、子どもがひっかかってよい問題がもてるように、視点を変えたり、内容を組み変えたり、順序を変えたりして提示することである。

身の周りにあって毎日ふれているのに見落としているような事実、毎日見ているようで見ていない事実などを新鮮な驚きをもってみなおせるようにすることによって、子どもが生き生きと学習に取り組むと考える。

(1)　子どもの意欲を引き出し思考をゆさぶる教材

①　子どもの既有の考えでは解釈できない教材

子どもの学習意欲が引き出されたり、思考がゆさぶられたりするときは、子どもがすでに身につけている知識や考えなど、自らの尺度では解決することのできない場面（教材）に出会ったとこである。この時、自然発生的に「おかしいじゃないか」「どうなっているのか」という疑問や問題意識が子どもたちの中に生まれてくる。

②　子どもの感情に訴え、心をゆさぶる教材

子どもたちは、教材と出会ったとき、感情を素直に表出する。「かわいそう」「なんとかしなければ」「これはたいへんなことだ」「どうしてそんなばかなことが起こるのか」「もったいない」などの表現で、子どもたちは素直な気持ちを伝えてくる。この素直な表現は、じつは子どもの心がゆさぶられたことであり、ここにこのことを解決しようとする追究への意欲が育っているとい言える。

③　子どもたちが多様な解釈をする教材

子どもたちは、本来未知なるものに出会った時、実に子どもらしい発想で自由に考えるものである。子どもたちが多様な解釈のできる教材と出会い、教師がその子どもたちの豊かな発想や考え方を生かすことは、社会科の学習を活性化するうえで、きわめて重要である。

④　日頃子どもの目に触れない「実物」の教材

実物の教材との出会いほど、子どもの学習意欲をかきたてるものは、他にないと思う。実物教材は、それを見たり触れたりしながら、意欲を引き出すことができる。また、それをもとに体験的な活動を組み入れることによって、学習をさらに楽しくするとともに、意欲を一層高めることができる。

(2)　地域の教材化の利点

- 地域の事実、事象を五感を通して直接観察ができ、実感をもってうけとめさせることができる。「百聞は一見にしかず」である。
- 観察、調査を取り入れることができるので、学級の全員を共通の土俵に立たせ、共通の経験をもたせることができる。
- 資料の収集・作成が容易となる。地域の人々や父母の協力が得られ、追究をとおしての交流を深めさせることができる。

・事実や事象に対して、自分の生活経験をふまえて取り組むため、自分たちの生活とのむすびつきを具体的にわからせることができる。
・地域社会の一員としての自覚や地域の人々に対しての共感をもたせることができる。

《実践―ゴミの教材開発について》

環境問題やリサイクルが叫ばれる今、ゴミの教材は、タイムリーである。
また、ゴミは、子どもたちとの生活にかかわり、身近な教材である。（ここで、身近な所とは、自分の家、学校、教室、住んでる地域（宜野湾市）などである。そして、どの子も共通する場所は教室である。そこで、どの子もかかわりのある教室から取り上げていく。）

しかし、子どもたちはゴミを意識していない。ただゴミが出れば、捨てればいいという感覚しかない。そこで、臭い、汚いゴミを出しているのは、自分たちであるということがわかれば、ゴミの問題は自分たちの問題として取り組むことができるであろう。そして、それは観察や体験等の活動を通して学ぶことができる。またゴミには、多くの人々がかかわり、その人たちの工夫や苦労を知ることができる。そして、子どもたちが地域の一員として「自分たちにできることはなんだろうか。」と考え、実践できる教材である。

ゴミの教材開発にあたって、いろいろな参考文献を読むと、ごみのゆくえを課題として追究していくのが大半である。しかし、子どもたちに、アンケートをとってみたところ、ゴミは、清掃車が清掃工場に運んでいくであろう。とか、埋め立てられる。ということは、だいたいの子が知っている。

そこで、ごみに関する資料を集めて、子どもたちが興味・関心がもてるものはないか考えた。ゴミ処理をするには、多額のお金がかかっているが、そのことは意外にも子どもたちは知らない。多額のお金を提示することで、子どもたちは、驚き、「何に使われているのかな。」という問いをもち、予想し、調べていくであろう、と期待できる。

5　体験的学習活動

体験活動を組み入れることによって、次のような学習活動が期待されると考える。
○教師が教え込む教師中心の授業から、子どもが進んで学習に取り組む子ども中心の学習へ変えることができる。
○地域社会や子どもの生活に根ざした学習を展開していくことができる。
○子どもにとって社会科の学習を楽しいものにすることができる。

(1)　体験的学習活動の方法分類

社会科で取り上げられている体験的活動は、学習の目的に応じて多様である。それらの活動は、子どもの実態や学習過程を考慮し、効果的に取り入れたい。

活動方法	活動内容	活動例（4年）
調査して調べる活動	いわゆる調査活動である。社会的事象を調査する活動においては、見学や観察等の活動が同時に行なわれることもある。	・学校にある蛇口のある場所と数を調査する活動 ・学校にある消火設備を調査する活動
実際に見てみる（見学）・観察する活動	工場や農家などを見学したり、博物館や郷土資料館などを訪ねたりする活動である。また、社会的事象や働く人たちの様子などをじっくり眺めたり観察したりする活動である。	・清掃工場や水道局の浄水場、下水処理場、消防署や警察などの見学 ・清掃車のおじさん等の働く様子を観察する活動
操作・構成活動	カードを使って整理したり、床地図に主な建物などを配置するなど社会的事象を操作したり構成したりして、事象をまとめたりその意味を考えたりする活動である。この活動には、カードを整理したりやり直したり、おいたりはがしたりして、思考錯誤しながら取り組むことができるところに特色がある。	・冬の寒さから人々のくらしを守る工夫をカードに書き、観点に従って、分類・整理する活動
ものをつくる（製作）活動	立体地図や模型、実物など、「もの」を実際につくる活動である。ものをつくる準備のための活動やつくりながらに試行錯誤する活動が重要な意味をもつ。	・県の土地の様子を立体地図に表す活動
実際にやってみる（実体験）活動	実際に手や足、体などを使って、直接参加したり行動したりする活動であり、事物や事象に直接触れながら体験する活動である。	・「郷土を開く」の単元で、昔の製法でさとうづくりをする活動
まねてやってみる活動	ごっこ活動、疑似活動、追体験、劇化、動作化などとも言われている模倣による活動である。	・「雪の多い地方の人々のくらし」の単元で、雪おろしの模擬体験をする活動
味わってみる（食味する）活動	食物を実際に食べて、それを味わったり、味のちがいに気づいたりする活動である。主に、食料や食物にかかわる学習で取り入れることができる。子ども個人の好みや衛生上の配慮を要する活動である	・「暖かい地方の人々のくらし」の単元で、真冬のすいかを味わわせる。
作物を育てる活動	作物を育て、育てる過程の様子や苦労、工夫がわかる活動である。	・さとうきびづくり ・芋づくり
作品にまとめる表現活動	観察・体験したことを文章で表したり、絵で表したりすることで学習のねらいを確かなものにする。	・○○新聞・ポスター作り ・見学ノート ・標語・紙芝居

(2) 体験的活動を組み入れる三つの場面

○学習問題を把握する過程への組み入れ

- 子どもが学習問題に気づいたり学習問題をみつけたりする場面である。学習がスタートする導入の場面で、体験的な活動に取り組む。その中から、子どもたちは、様々な疑問や問題意識をもったり、不十分さや問題点などに気づいたりしながら、これからの学習の内容や方向を決めていくことができる。
- 学習問題について、自分なりの予想を考える場面である。体験的な活動を通して、自分の予想や検証方法を一層明確にすることができる。
- 調べる計画を立てる場面において、体験的な活動ができる。

○問題追究の過程への組み入れ

ここでは、様々な体験的な活動を通して、新たな社会的事象に接して事実の認識を深めたり、自分の願いや気持ちを発揮したり、さらに、人間の生き方に学んだりしながら、自分の疑問や予想を確かめ、学習問題の解決を図っていくことである。ここでは、体験を通して得たことをもとにして、子どもが自分なりに問題の解決を図るようにすること、社会的なものの見方や考え方を深めるようにすること、また、ここで体験した活動がすべてではないという限界に気づくようにすることなどが、指導のポイントとして、重要である。

○学習のまとめの過程への組み入れ

ここでは、学習問題を追究し明らかになったことを、まとめたり発表したり、または確認することが主なねらいである。体験的な活動を通して子ども一人一人のねらいとしているものを最終的に獲得し、自分のものとして定着していくことができる。

また、体験をもとにした表現活動や話し合い活動を行なうことにより、残された問題を明らかにし、次の学習へ発展させることもできる。

《実践―体験的活動を取り入れた学習活動》

○学習問題を把握する過程

教室のゴミを一週間集め、教室のゴミを予想し、実際に袋を開けてしらべる。

- 子どもたちが出したゴミの量をはかりで計って、重さを調べたり、袋を実際に開けてゴミの種類を調べたりすることで、ゴミの量の多さを実感させる。また、調べている時、ゴミの匂いやかび等をみることで、五感を通して、ゴミの現状を知る。（この活動は、衛生面に配慮する。）

教室以外のゴミを調べる。

- 家庭や公園、お店等のゴミを調べることで、身の回りにいろいろな種類のゴミがあることに気づく。（家庭学習にし、二時間目の学習で発表する。）

○問題追究の過程

清掃工場の見学をする。

- 清掃工場を見学し、そこで働いている人の様子を観察することにより、働いてい

る人の工夫や苦労を実感したり、施設・設備に気づく。

ゴミ収集の様子を見る。（ＶＴＲ） ゴミ収集のおじさんにインタビューする。

・ＶＴＲを見ることで、おじさんの仕事の様子や苦労に気づく。
・インタビューをすることで、働く人の気持ちや願いがわかる。

自分にできそうなゴミの減量を調べる。

・ゴミの減量方法を自分自身で調べることで、色々なゴミの減量の仕方があることがわかり、ゴミの減量について意識する。

○学習のまとめの過程（仮説３との関連）

ゴミの減量に向けて、自分の考えを作品にかく。（ポスター、紙芝居等）

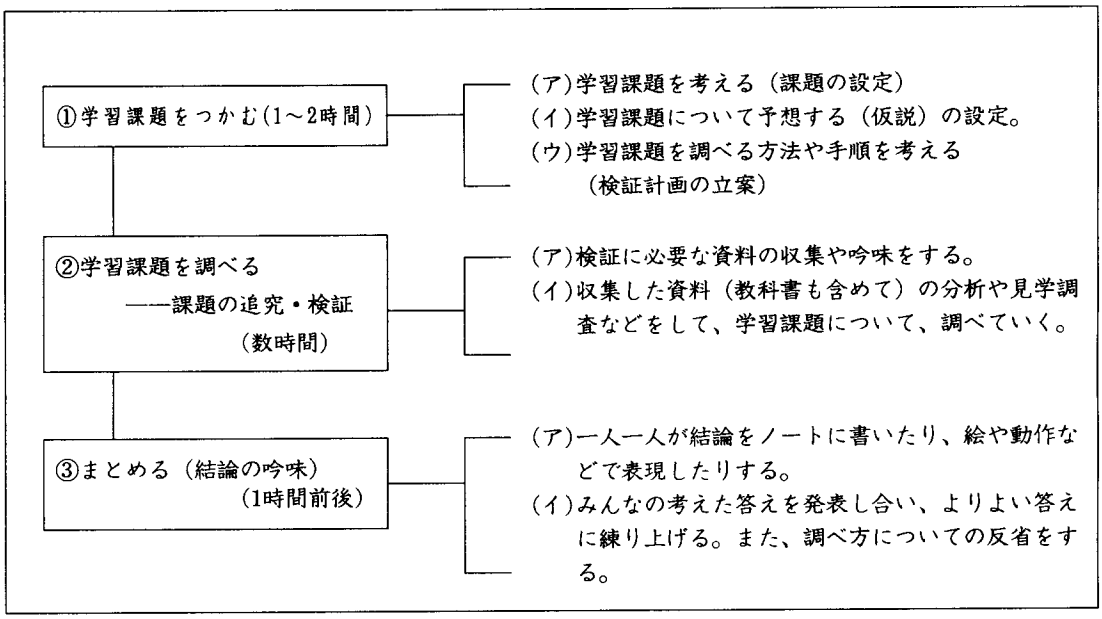
・４年生の社会科の「地域社会の一員としての自覚を高める」というねらいに照らして、自分の生活とのつながりを見付けることによって、社会的事象を自らの問題としてとらえさせるようにしたい。そのために、まとめの過程で、これまで学習してわかったことを今度は自分たちが他の人に教えてあげる場を設定して、子どもたちを情報の受け手から投げ手になるようにしたい。例えば、関係機関の人たちへの手紙やポスター・標語づくり等、一人一人が得意とする表現方法で、作品をつくることに取り組む。そうすることで、仮説３にせまるようにしたい。

6　指導過程の工夫

子どもたち一人一人に、社会的事象の意味を考えさせ、正しい判断を身につけさせるには、何よりも子どもたちの主体的な学習を可能にする学習過程をくまなくてはならない。

子どもたちが課題意識をもち、それを意欲的に追究していくには、「課題（問題）をつかむ―予想をたてる―調べる―まとめる」という学習過程が望ましい。問題解決的学習や発見学習、探究学習など、様々な方式が提唱されているが、この学習過程を基本にしながら、子どもの発達段階や教材の内容に応じて、柔軟な組み立てを工夫していきたい。子ども主体の学習過程を工夫することは、子どもに“何をどのように学ぶかという学習のしかたについての能力（自己学習力）”を身につけることである。

問題解決的な学習過程（例）



V　授業実践

第４学年社会科学習指導案

平成７年６月５日　５校時
普天間第二小学校４年２組
指導者　宮 平 香 代 子

1　単元名　「健康なくらし」

2　単元について

(1)　単元目標

人々のくらしにとって必要な飲料水・電気・ガスなどの確保及び廃棄物の処理についての対策や事業が計画的・協力的に進められていることを調べ、これらのことは地域社会の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解する。

(2)　単元構成

地域の人々の健康な生活を維持し、向上させるために、地域社会では、計画的・協力的な活動を行なっている。

地域の人々の健康で快適な生活を維持するために県(市町村)では、水を確保し供給する事業を他の地域と協力しながら組織的・計画的に行なっている。
「水はどこから」

地域の人々の健康を守り、環境をよくするために、県（市町村）では、ごみの収集・処理の事業を組織的・計画的に行なっている。
「ごみとわたしたちのくらし」

(3)　小単元名　　ごみとわたしたちのくらし

(4)　単元設定の理由

私たちは、毎日の生活のなかで、ごみを出し、ごみを捨てるという行為を繰り返している。そしてごみは、決められた日に決められた場所に出しておけば、清掃車のおじさんが焼却工場に運んで、燃やして灰になる、ということをアンケートの結果から大半の子が知っている。また、「なぜ、ごみを集めないといけないのか。」ということも漠然と知ってはいる。

しかし、ごみを処理するために、市が莫大なお金をかけているということは知らない。ごみが出るとごみ箱に捨て、誰かが片付けてくれることは、当たり前のこととして、何も疑問が出てこないのである。

ごみの分別化とかリサイクルがよく言われる今、見つめ直すよい機会である。そして、私たちが気持ちよく暮らせることをごみを通して改めて考えたい。さらに、地域の一人として、自分たちにできる協力や工夫について具体的に考え、行動をおこすきっかけとしたい。

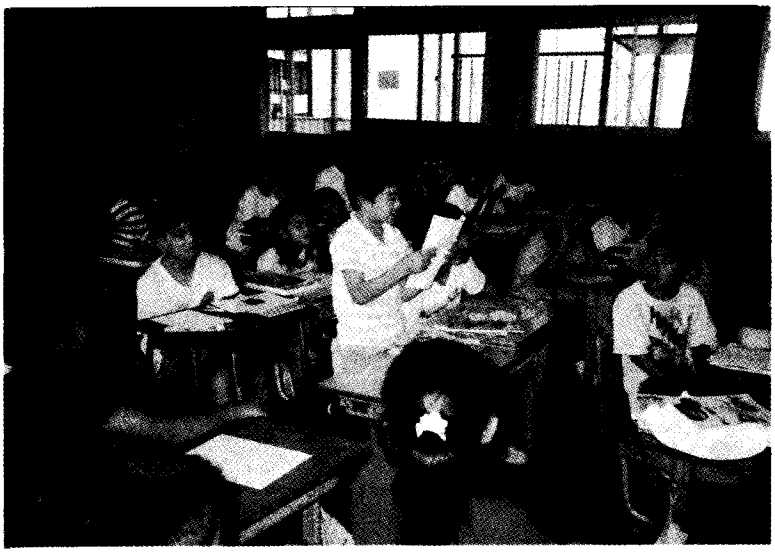
(5) 小単元の目標

ごみの収集や処理は、健康な暮らしを守るために、計画的・協力的に進められていることを理解し、自分たちに何ができるかに気づき、実践しようとする意欲をもつ。

3 単元全体の学習計画

過程	活動のねらい	時間	主な学習活動	評価項目
つかむ	自分の身の回りにはたくさんのごみがあることに気づき、ごみのゆくえを予想する。	1	・教室からでるごみの量や種類について調べる。	・教室から出るごみの種類や量について意欲的に調べる。(態度)
		2	・家や公園等のごみを調べてきたことを発表する。 ・処理のしかたを予想する。	・家や公園等のごみの種類や量がわかる。(ワークシート、態度) ・身の回りにはたくさんのごみがあることがわかる。(発言、ワークシート)
たてる	宜野湾市から出るごみの量と処理する値段から清掃工場や清掃車について問いをもち、予想をたてる。	3	・宜野湾市から出るごみの量と処理する値段を知る。 どうしてごみをかたづけるのに、たくさんのお金がかかるのでしょうか。 ・清掃工場や清掃車の必要性を知る。 ・予想をたてる。	・清掃工場や清掃車の必要性がわかる。(発言) ・お金がかかるわけを予想する。(ワークシート)
調べる①	ごみの収集方法についてVTRを見て、きまりや働く人の様子や苦労がわかる。	4	・ごみ収集車の作業の様子をVTRで見る。	・ごみの収集のきまりがわかる。(発言) ・働く人の様子や苦労がわかる。(つぶやき、ワークシート)

	清掃工場の見学を通し、ごみ処理の仕方を理解する。	5	・清掃工場を見学する。（工場の施設・設備、処理の仕方、働く人の工夫や努力等）	・見学のめあてをもつ。（ノート） ・意欲的に見学ができる（態度、つぶやき） ・工夫してまとめる。（国語と合科）
調べる②	ごみの減量化にむけて私たちが協力できることを話し合い、自分で減量方法を調べ、発表し合う。	6	・ごみの減量の方法について話し合い、自分たちにできることを考える。	・ごみの減量に関心をもち、自分にできることを考える。（発言、ワークシート）
		7	・自分のごみ減量を発表し合い、そのよさを話し合う。	・ごみ減量について調べ発表することができる。（態度、発表、内容） ・再利用のよさがわかる。（発言、ワークシート）
まとめ	単元を振り返り、自分なりの考えをもつ。	8	・ごみの減量に向けて、自分の考えを作品にかく。	・これまでの学習のまとめをする。（作品）



4　本時の指導（1／8、仮説2の検証）

(1)　1時間目の目標

教室には、たくさんのごみがあることに気づき、身の回りのごみに興味をもつ。

(2)　観点別目標

《関心・意欲・態度》

教室から出されるごみのりょうや種類に興味をもち、調べてみようとする。

《社会的な思考・判断》

たくさんのごみが出るわけを考えることができる。

《観察・資料活用》

教室から出るごみの種類や量を調べることができる。

《知識・理解》

教室にはたくさんのごみがあることがわかる。

(3)　授業仮説

一週間の教室のごみの種類や量を実際に調べることにより、五感を通してごみの種類や量を実感させ、誰がごみを出したかということを考える場面を設定することで、身近なごみに興味・関心をもつであろう。

(4)　1時間目の展開

過程	主な学習内容	指導上の留意点	学習形態	評価
つかむ	1、六つのポリ袋を見て、思ったことを言う。	・先週一週間取っておいたごみを提示する。	一斉	
	2、ごみの量を重さで表す。	・ごみがでない日はないことをわからせる。（はかり）	グループ	
	教室では、どんなごみが出ているのでしょうか。			
	3、ごみの種類を予想する。	・多いごみは何か予想させる。	個 個 個	・進んで予想することができる。
調べ	4、ごみ袋のなかみを調べる。	・衛生面に気をつける。（ゴム手袋、新聞紙	グループ	・グループで協力して調べる。

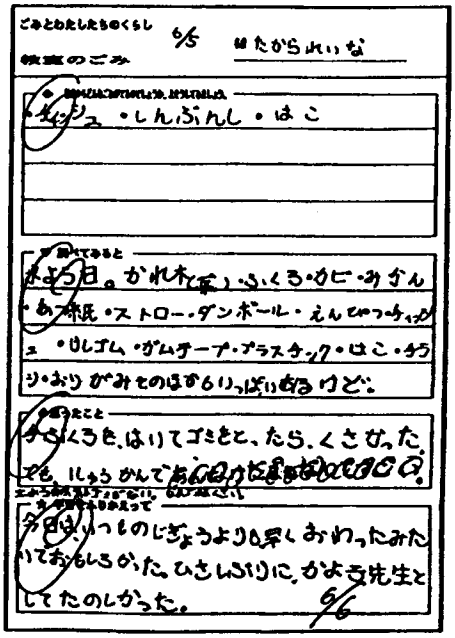
	5、調べて気づいたことを発表する。	・自分自身もごみを出していることに気づかす。	一斉	・教室から出るたくさんのごみの種類がわかる。 ・たくさんのごみが出ているわけがわかる。
まとめ	6、他にどんな所からどんなごみがでているか予想する。 7、今日の学習を振り返る。	・いろいろな場所からごみが出ていることに興味をもたす。 ・個のよさをとらえるための資料とする。	個 個 個	・進んで予想することができる。

(5) 授業を終わって

子どもたちが共通体験できる場であり、また、子どもにとって、身近でありながら、なかなか意識していない教室のごみから導入したことは、興味・関心を引いた。

そして、実際にごみの重さを計ったり、触ったりする活動を行なったことで、ごみの量や種類の多さがわかった。

しかし、1時間の内容が盛りだくさんであったため、活動する時間が長くなり、「誰がごみを出したのか。」ということを考える場を設定する時間が短くなったのと、発問がうまくできなかったことで、自分自身もごみを出していることに気づく子が少なかった。また、「教室以外の身近な場所にもごみがあるのではないか。」ということを子どもたちから出てこなかったのは、話し合う（討論）する場を設けなかったからだと考えられる。


ごみとわたしたちのくらし　6/5　はたがれいな
教室のごみ
・ティッシュ・しんぶんし・はこ
・あつ紙・ストロー・ダンボール・えんぴつけずり・ゴムチューブ・プラスチック・はこ・チラシ・おりがみのはがきいっぱいあるけど。
でも、しゅうかんであつめたらまだまだたくさん。
今日はいつものじょうよりもはやくおわったみたいでおもしろかった。ひさしぶりに、かよ先生としてたのしかった。6/6

5．本時の指導（3／8　仮説1の検証）

(1)　3時間目の目標

宜野湾市から出るごみの量と処理する値段から清掃工場や清掃車について疑問をもち、予想をたてる。

(2)　観点別目標

《関心・意欲・態度》

ごみ処理にたくさんのお金がかかっていることに関心をもち、進んで予想をたてる。

《社会的な思考・判断》

ごみを処理するのにお金がかかる理由を考えることができる。

《観察・資料活用》

年々ごみが増えていることがグラフからわかる。

《知識・理解》

年々ごみが増えていることがわかる。

(3)　授業の仮説

宜野湾市にごみがたくさんあることがわかり、そのごみを処理するには、多額のお金をかけていることを知らせることで、「なぜ、ごみ処理をするのにたくさんのお金がかかるのか」ということを予想することができるであろう。

(4)　3時間目の展開

過程	主な学習内容	指導上の留意点	学習形態	評価
つかむ	1、これまでの学習をふりかえる。		一斉	・年々ごみが増加していることをグラフからわかる。
	2、宜野湾市全体の1日のごみの量の移りかわりのグラフを見る。	・年々増加していることに気づかす。		
	3、宜野湾市の年間のごみの量を知る。	・年間25347トン 4年生の子ども(30kg)の 844900人分の重さ		
	4、たくさんのごみは、どうなっているのか予想し、話し合う。	・なぜ、かたづけないといけないのかということに気づかす。 ・ごみ処理場	個 個 個	・ごみの行方について予想することができる。

	5、ごみ処理にたくさんのお金がかかっていることを知る。 どうして、ごみをかたづけるのにたくさんのお金がいるのでしょうか。 6、予想し、話し合う。	・ごみ収集車 ・埋め立て地	一斉 個 個 個 一斉	・ごみを片づけるのに、なぜたくさんのお金がかかるのか予想することができる。
まとめ	7、調べてみたいことを発表する。		個 個 個	・自分が調べてみたいことを発表することができる。

(5) 授業を終わって

宜野湾市にたくさんごみがあることを知らせ、ごみの行方やなぜ、ごみ処理をしないといけないのかということを予想させたことで、「なぜ、ごみをかたづけるのにお金がかかるのか。」ということの予想をすることが、スムーズにできた。それは、まず、最初の予想で、子どもたちの既有の知識をださせ、話し合いをすることで、わからない子にも知識を分け与えたことになる。そうすることによって、子どもたちは、大体同じくらいの知識をもったことになる。最初の予想をヒントとして、どの子も予想をたてることができたと思う。一見、同じことを2回繰り返しているように思えるが、これは、どの子にも同じラインに立たせるためである。

この時間に、どの子も予想することができなっかたら、調べようという気持ちにはならないので、しっかりと子どもの思考を考え、授業を組み立てていったことがよかったと思う。また、子どもから、「調べに行ってみよう。」という声が出てきたのでよかったと思う。

6　本時の指導（8／8、仮説3の検証）

(1)　8時間目の目標

これまでの学習を振り返り、自分なりの考えをもつ。

(2)　観点別目標

《関心・意欲・態度》

進んで、これまでの学習のまとめをし、作品に表すことができる。

《社会的な思考・判断》

ごみの減量に向けて、自分の考えをもつ。

《観察・資料活用》

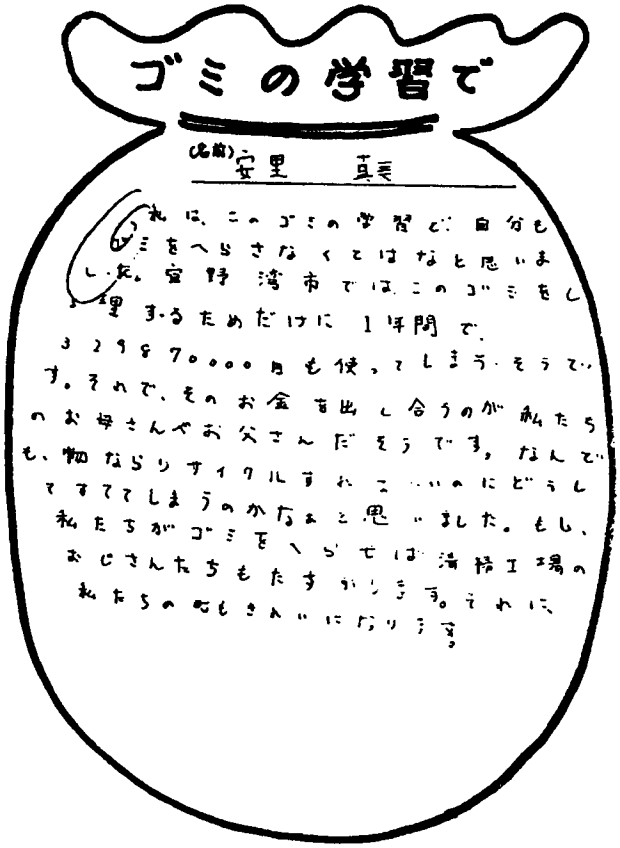
自分の考えをまとめる資料として、これまでの学習内容を活用することができる。

《知識・理解》

ごみを減らすために、自分たちも協力できることがあることがわかる。

(3)　授業仮説

これまで学習してわかってきたことを他の人に教えてあげる場を設定することで自分の生活とつながりのあることを見付けだし、ごみの問題を自らの問題としてとらえようとするであろう。



(4)　授業を終わって

子どもたちは、ある程度は自分とのかかわりについては考えることができた。それは、前時に「自分たちに協力できることはないか。」ということで、リサイクルのことについて調べ、発表し合った。そこで、今まで知らずにやってきたことが、リサイクルだということに気づいたり、友だちの発表から再利用のよさに気づいたためである。

しかし、作品づくりの過程で、情報をうける相手を意識してかかさなかったために、情報の投げ手にはなりえなかった。それで、社会事象と積極的にかかわるという態度が弱く、自らの問題としてもとらえることがなかなかできなかったように思える。

Ⅵ　研究の成果と今後の課題

子どもたちが生き生きと社会科を学習していくために、小単元での導入・展開・終末でどのような支援を行なえばよいかを課題として、半年間の研修に取り組んできた。研修を進めているうちに、「社会科とは、いろいろなものへのかかわりを子どもたちに気づかせることである。」ということに私自身が改めて認識した。

1　研究の成果

(1)　地域をまわり、たくさんの資料を集め、清掃工事や清掃車の会社に行って、話を聞き、ＶＴＲにおさめて資料になるものを作ったり、教材開発をしたりしたことが、私の普段の授業より、子どもたちの興味・関心を引くことができ、生き生きと学習に取り組んでいくステップになったと考えられる。

(2)　子どもの身近な教材を開発することで、知っているようで、意外と知らない事実を知らせることで、多様な予想を出させ、「調べてみよう」という意欲をもたせることができた。

(3)　体験的活動を取り入れることで、なんとなくわかっていたことが、実感的に理解できたり、気づかなかったことに気づいたりすることができた。

2　今後の課題

(1)　発問の工夫

(2)　討論の場の設定の仕方

(3)　体験的活動の生かした授業構成のあり方

(4)　社会的事象を積極的にかかわらす表現活動のさせ方

これらの課題を解決するために、今後も微力ながら研究に励んでいきたい。

〈主な引用・参考文献〉

文部省	「新しい学力観に立つ社会科の学習指導の創造」	東洋館出版	1993
北俊雄	「新学力観に立つ社会科」	明治図書	1995
古川清行　他	「子どもが生き生き学ぶ社会科　４年」	東洋館出版	1990
有田和正	「追究の鬼」を育てる　―有田和正著作集―		
	「学習意欲はこう高める」	明治図書	1989
中野重人	「社会・教材研究の仕方」	教育開発情報センター	1989